岡山大学経済学会雑誌30(4),1999, 527～554

《史料紹介》

大正初期の岡山県南部農村における農業・藺業

——佐藤悦太郎『ある百性の日記』の紹介——

神　立　春　樹

目　次

1　はじめに
2　地域の産業的特性
3　農家の仕事
4　農業
5　藺莚製造

1　はじめに

本稿は佐藤悦太郎氏の記録を紹介し，それを通じて明治末・大正初期の農業・藺業の生産・労働の状況を示すものである。

佐藤悦太郎氏は1900（明治33）年8月22日に岡山県都窪郡早島町の畑岡に生まれた。生家は水田7反歩，畑1反歩ばかりを自小作する農家であった。7人兄弟姉妹の4人めであるが上はすべて女で，長男であった。1907（明治40）年4月，早島尋常小学校に入学し，1913（大正2）年3月に卒業した。引き続き町村組合立開成高等小学校に入学したが，病のため同年中に退学した。静養して健康を取り戻した後，1915（大正4）年1月，青年団への入団を契機に家業である農業及び藺莚製造に従事した。戦後，早島町議会議員，早島町藺草藺製品農業協同組合長などを歴任した。

佐藤悦太郎氏は，生後物心がついてからの回顧を『ある老人の思い出の記』(1984〈昭和59〉年11日28日付はしがき　B５判全49丁　手書き・謄写印刷）として記したが，それ以後のことを『ある百性(ママ)の日記』(1984〈昭和59〉年12月15日）として記している。これはB５判全53丁で，通しの丁数が付してあるが，「ある百性の日記」と「ある老人の思い出の記」からなっている。「大正４年１月から昭和３年初め頃まで」(表目次)，あるいは「大正４年１月から昭和２年終り頃まで」(裏目次）とあって，従事した農業・藺業についてのものを取り出して独立させ，それとそれ以外についてという二つにわけたものである。これまた手書き謄写印刷である。『ある老人の思い出の記』は農業に従事していなかった時期についてのもので，農業についての記述が少ないのに対して『ある百性の日記』においては農業に初めて本格的に従事した経験からの農業に関する叙述が多い。ここでは，明治末期・大正初期の実態をこの記録を通じて示すことを目的とする。以下の『ある老人の思い出の記』,『ある百性の日記』からの引用などは，前者は＊，後者は＊＊で示し，その丁数を記すものとする。

2　地域の産業的特性

岡山県南部は，水田が広がり，稲作が展開している。また，平坦地域では藺草の栽培が盛んである。そもそも岡山県は戦前期，わが国最大の藺莚生産県であるが，この岡山県にあって，この早島町が属する都窪郡は藺草の栽培とその加工である藺莚製造の中心地であった。

このような地域にあって早島は江戸時代から畳表の取引の中心地で，この地域の畳表は早島表と称されるように，その名は広く知られていた。明治になってからも，たとえば1886（明治19）年の岡山県の畳表問屋名簿によると，東京積問屋が県下市町村のなかで最も多い所である。問屋の取扱い量も大きく，有力な問屋がある取引の中心地であった。明治20年前後からの輸出

に支えられた花莚生産が興隆すると，これら問屋が会社形態での工場生産を開始したりしている。

1910（明治43）年の早島町の生産高は合計37万7372円で，生産物の数量・価格とその比率は，畳表　15万枚・4万5000円（11.9%），ミノ莫蓙　6000枚・3600円（0.95%），花莚　2万2500本・13万5000円（35.8%），藺草　16万1700貫・5万4000円（14.3%），米　8140石・10万1750円（27.0%），小麦　2200石・2万2000円（5.8%），裸麦　1194石・8955円（2.4%），蚕豆　450石・3600円（0.69%），その他　3467円（0.6%）である。米を最大とし，それと麦類が主要農産物であるが，米の半額を越える藺草，米を遥かに上回るその加工品である花莚・畳表などの藺製品，という藺業の町である。(1)

3　農家の仕事

この地域の農家は，水田の表作に稲を，裏作に麦や藺草を栽培する。この藺草はそのまま販売するか，あるいはそれをもって畳表を製織して収入を得る。悦太郎の生家もそのような農家であった。すでに記したように，生家は，耕地面積は田7反歩，畑9畝歩で，約8反歩の経営の自小作農家である。副業として畳表・莫蓙織を行なう。この農業と藺莚業が生計のもとである。

悦太郎は，幼少の頃，母親が田圃へ行くときはついて行ったり，*10 藺刈の傍らにいたり，*13 家の前の田圃での父母の草とりを見たり，*15 した。また，小学校のとき，稲の害虫のずい虫取りを先生に引率されて行なった*36 ことがあったり，母の言いつけで近くの道端の田圃のえんどうちぎりをした。*43 このように，悦太郎にとって農業は身近であった。

1913（大正2）年4月に高等小学校に入学した。男子は商業科と農業科で，農業科に入った悦太郎は，農業実習を経験する。その5月，近くの実習田で苗代の準備があり，主な作業は近くの農家の人がやってくれたが，軽い

作業は先生と生徒がした。[*45]高等小学校に入った年に健康上の理由でそこを悦太郎は退学した。その年，

畑にもよくついて行って，いも類，大小豆，粟，そば，野菜類の耕作を手伝い，家ではなわをなうけいこをしたり，ぞおりの作り方を教えてもらったりして，少しづつ体をきたえるかたわら仕事を覚えることにして，当分勉強は病気がよくなるまではせぬようにした。何でも早くこの病をなおさねばと懸命であった。[*47]

1915（大正4）年1月1日，長津の青年団の一員となる。これまで仕事らしい仕事をしてこなかったが，これから家の仕事に従事する。

7反歩の水田は表作には稲，裏作に麦，藺草，蚕豆を栽培した。藺草は1反歩，[**11]蚕豆は1反歩[**4]と記されているので，麦は5反歩ということになる。畑は9畝歩で家から150メートルほど離れた小高い丘にある。ここでは後にみるように，多種類の作物が栽培される。

これの作物栽培，収穫などに農具を使用する。

耕耘に関するものとしては鍬，[**15]除草には手鍬，[**10]すり機（田の草），[**13][**41]が出てくる。また泥をさらうのにじょれん，[**11]が用いられた。記されていないが収穫には鎌が使用された。

田植のときの苗を入れる苗かご，[**8]雨のときの蓑（ゴザを張った）[**9]も記されている。

脱穀・調整に関するものは多く記されている。唐竿・よじろ，[**8]稲扱・手こぎ・千歯，[**15]豆こぎ，[**17]麦打台，[**7]土臼・石臼，[**16]臼，[**17]唐臼，[**9]唐箕・ふるい，[**16]である。脱穀した麦を入れるのは俵・叺，[**7]である。米もそうであろう。

田に水を入れるのに水車，[**8]を使用する。足で踏むのである。

運搬用具としては，天秤棒，川舟，馬車，中車，猫車，[**19]があげられている。

物を運ぶには，天秤棒でかつぐのが主であった。農家などでは一部の地域で川舟を使っていた。専業，事業用には馬車，中車があったが，一般には猫

車（一輪車）が僅かに目についた。

牛は飼育していないので牛による耕耘は他にやってもらう。[**8]

馬をもっている農家も相当あって，若い者たちがよく乗りまわしていた。農閑期（春の末頃）には田んぼに臨時の馬場をつくって，草競馬がほとんど毎年行なわれ，各地から同好の者が馬をつれてきて競馬をした。大勢が見物した。[**19]

農閑期に総がかりで行なうのは表打ち，すなわち畳表，[**18] ゴザ織[**29~30]である。表を織るために使用する経糸を紡ぐヒメウミがある。これにはヒメウミ機を使う。[**19] これについては後に記すが，それ以外の営みもある。

その一つは藁仕事である。「この地方では秋の農閑期にはどこの家でも総がかりで表うちをするので，わら仕事は出来得る限り春に済ましておく」。雨の日には父と二人で藁仕事をした。

> まず細いなわをなって米・麦を入れる俵編み，それを結える太いなわ，藺を束ねる藺つがい，田んぼに引く藺田引きなわ，俵の口をかがる小口なわ，となわにもいろいろあるものだと思った。[**6]

このように，さまざまの縄類，俵編みである。ときには草履・鞋も作った。[**6]

収穫物の加工もある。畑の最後の仕事は大根ひきで，聖護院大根，練馬大根を収穫するが，その加工保存である。

> 当座に食べるものはそのまゝ畑に残しておいて，引いた大根は家に持ち帰って大小いろいろ分けて，適当に束ねて軒先や竿をこしらえてかけて乾した（大きいものは沢庵漬に，長く細いものはねじ大根に，折れたりキズのあるものは切干大根にした）。
>
> 適当に乾いた頃，竿から下ろして表面を藁でこすって，大きい樽に糠と塩とで漬

けたが，これは父さんの仕事であった。また浅漬といって余り乾かさずに漬けて，数日経って食べるものも拵えた。**17

その他に，農民の賃稼ぎもあった。

1917（大正6）年に早島紡績会社が設立され，工場が建設された。工場用地は早島町の字山崎から宮の後に亘る3町4反4畝7歩で，半分が水田，半分が山地で，山を崩して水田を埋め，敷地を造成した。(2) この工場用地造成工事に悦太郎も参加した。

資本金は敷地の大部分が長津の人の耕作していた農地であり，また村続きであったから，会社からも村へ挨拶に来て協力の要請があり，附属の建物も地内に建てられることになって会社と村は密接な関係にあった。

南側の山の土を採って地上げをし，一体の厚い岩盤を割って建物をする部分を敷きつめて，長い期間何回も「エンヤコラサー」をやった。

常雇人夫は長津の人を優先的に使ってくれたから村の人は大勢働きに行った。幸い村の人が二人人夫頭をしていたから自分も農閑期や仕事の合間に働きに行った。日当は一日四十八銭であった。始めは他の人たちと働いていたが，監督に認められて仕事の楽な材料係となって材料の出し入れの方に変ったから，雨の日にも働に行けてよかった。**40

4 農　　業

(1) 稲　　作

①苗代

苗代田は父と一緒にこしらえた。籾まきは自分には少々無理だったので，父がひとりで蒔いた。もみをまくとすぐ雀が寄って来て拾いあらすから鳴子や案山子を拵えて立てた。それでも来るのでつききりで番をした。隣の老翁さんは苗代のあぜに

ゴザを敷き古いカサを立てかけてその下でゾーリをつくっていた。

もみまきについて，自分はもみを洗ってくずもみを浮かしてとることや，叺に入れて三，四日川に投げこんで芽を出すこと，苗代田の作り方，もみのまきかたなど，いろいろ覚えることができた。**[5]

もみ種を洗うとき，父は反当り四升五合位のあてで洗うといっていた。他家にも大体それ位らしかった。**[21]

稲の品種は，「神力」が主で，「吉備穂」が何程かあった。糯は「カラスもち」で，次第に「大正もち」にかわった。**[5]

堆肥づくり

春の田んぼの仕事に，重要なものがもう一つ，堆肥づくりがあった。寒中土がよく凍る頃に川泥をあげておいて，それが乾いた頃何回も鍬を入れて少し砕いて，暖かくなった頃藁や塵芥と交互に高く積み上げて，雨水のはいらないようにワラで覆っておく。

之を八，九月頃に，もう一度麦わらや川岸の草，はきだめのごみなどを交ぜて積みかえる。秋麦をまくときその上におそうので，麦作には極めて重要な仕事であった。**[5]

②田植

田植えは用水の関係から日を決めて一斉に始めることになっていた。**[8]

田植えが始まった。雨は降らなかったが川に一パイ水がきて，低い田にはのりこんでいた。家の田は中田であったから全部水車をふんで水を入れた。早速一ます代をしてもらって植えることにして苗代にはいった。苗をとるのは始めてでどうも他の者のようにうまく根元が揃わない。「少々手間はいってもていねいに元を揃えるようにせえよ」といわれて少しづつ念を入れてとったら，何程か揃って格好がよく

なった。

父は苗かごに苗を入れながら「悦がかつぐよりはまだわしの方が余程余計にかつぐからのう」といってかついで行った。後の者は二把づつ両手に提げて行った。

「ぼちぼちでもええからきれいにうえよ」といって植え始めた。田植えは去年少しばかり植えた経験もあるので，早くはなかったがどうにか人並にうえられた。

あくる日は朝から雨だった。今日はみのを着ねばならんのか，退儀だなあと思ったが，みんなだから元気を出さねばときゅうくつなみのを着て出かけたが，身体が小さいのに普通の型のみのだったから，ちょいちょいすそが水につかって要領が悪い。

雨は終日降り続いたからゴザを張ったみのは水をふくんで次第に重くなり，少しづゝ裏側にもしみ通ってじばんが湿めって気持が悪い。早よう日が暮れればよいがと思いながら雁張った。晩仕事を終えて帰ったときは背中の方が全部濡れていた。急いで素裸身になったらじばんから湯気がたっていた。「今日はほんとに悪かったなあ」と云いながら他のものも着がえていた。**[8～9]

田植がすむと「代みて」をする。「代みて」には寿司をつくって食べる習慣であった。材料は，魚屋で買ったヒラ，竹薮から堀ってきた真竹の筍，それに椎茸，かんぴょう，高野，じゃがいもである。**[9]

［藺草］の跡植えは本田とは異なった。

跡植えはチンマチ植えで，一人一人で植えたが，ナワも何んにもひかずに無茶うえにしたから，広い所や狭い所ができた。本田はきれいにナワをひいてうえるのにどうして無茶うえにするのかわからなかった。自分が少し大きくなったら本田のように正条植にしょ(ママ)うと思った。**[13]

③稲の肥入れ

田植えがすんで父は肥入れをした。何程いれたかは，量は聞いてないが，ニシン

粕と大豆粕をいれていた。その頃はニシン粕が大きな俵に入れられて大量に売られていた。五，六寸もの長さの大きいもので，カズの子なども混じっていた。カラウス（米をつくうす）で小さく粉にして田んぼに入れる。大豆粕は藺草に使ったものと同じであった。

当時の稲肥には殆んどがこの二種が使われていたが，父は「ニシン粕は稲のためによいが少し高いからのお」と云っていた。

ニシン粕の新らしいものは食べられるようなものがあって，隣のおぢさんは「これはええぞ」といいながらニシン粕を食べたりしていた。**9～10

④田の草取り

代みてがすぎて一，二日たつともう田の草とりが始まった。田の草とりと云っても，手鍬と云うものを片手にもって土をひっくり返し，片方の手で均らすので，いつもかがんで両手を使うからなかなかしんどい仕事で，これを縦横二回やる。これは一番草，二番草といった。自分は一年生だから少し軽い手鍬を買ってもらってやったが，始めてのことでとてもつかれた。

三番草は手取りで，もうその頃は稲株の根元に小さい草が生えているから，これを手で土ごと混ぜ返す。この三番草を取ってから藺刈りをするのが普通であった。近所に人手の少ない家があって，三番草を取らずに藺刈をしていたが，藺刈後には草が大きくなって，とるのが大変だったと云っていた。**10

藺刈りをしている間に田の草が余計生えた。手で取るのは大変だから総出ですり機をもって株間をすった。縦横に二回すったらさしもの草も往生して水の中に浮いて，ぶらぶらするようになった。

草が浮いて弱ったところで手取りをする。手取りは機械でとれない根元の草と浮いている草を取って土に埋めるので，跡はさっぱりときれいになる。これでもう始めから六回もとっている。最後は水を落として，土をならすようにして塗る。これは麦をまくときのために地面をならすのと，草を塗りこむとの両方であった。後は

足跡がつかない位の硬さまで干す。これで田の草は終って，後は時折り水かきをする程度で仕事が楽になった。**[13]

⑤稲刈り

稲刈りは十一月にはいってから始めた。その頃は米に青があってはいけないことになっていたので，よく熟れるのを待って刈った。併しよくうれると味が悪いので自家用のものは早く刈り，検査を受けるものは中旬以後に刈っていた。

稲刈りを半分足らずした十一月十日に天皇陛下の御即位式があって五日間の家業止めで稲刈りもできなかったから，残りは十五日以後に刈った。余り遅くなるとうれすぎて米はきれいであったが，茎が枯れて茎節が黒くなって，刈るとき千切れるから昼は刈れない。朝早く茎のしめっているときに刈って，一振り振って茎をのばして並べた。

この地方ではべた刈りと云って三株幅位に刈って，田んぼ一面に並べて乾す家が多かった。穂も藁もよく乾いて後の始末が早かった。中旬以後には茎も枯れるようになるから，穂だけ拡げ根元を重ねる扇形に刈った。下旬になると穂も茎もずっと水分が無くなっているから，適当に寄せておく。

べた刈りを天気のよいとき，三日から五日位しておくとよく乾いてもみの乾燥も早くすみ，わらもすぐ重ねられて非常によかったが，運悪く途中で天気が悪くなって夜雨など降ると，寄して重ねる訳にもゆかず濡らして仕舞う。それが乾かぬうちにまた雨が降ることになると，いつまでも放っておかねばならぬから麦まきにも差支える。よく乾いたものは一か丶え位づつ一ケ所に集めて丸く穂を真中にして積み重ねておく（丸ぐろといった)。扇形，寄せ刈りにしたものも一応丸ぐろに重ねる家が多かった。**[14～15]

⑥稲こぎ

稲こぎは手こぎで一握りづつ千歯でこいだ。一握りづつだから，なかなかはかどらない。ふるいでおろして持って帰るがかつぐことには一番困った。これだけはど

うにも我慢の仕様がなく，途中でおろして休みながら帰った。

藁は大きく束ねて元を広げ先を両方合せて立て、おいて，よく乾いた頃に長ぐろに本積した。

もみは唐箕でゴミやしいらをとって莚に入れて乾し，一日に一，二回さぐる。田んぼでの乾き具合によって違うが普通の天気で二日から三日，田んぼで乾いてないものはそれ以上に乾した。乾燥が悪いと検査で不合格となる。不合格米は売るにも安く地主もきらったから乾燥はよくしていた。

適当に乾燥したらトース引きをする（もみすり）。昔ながらの大きな土のウスを引いてもみがらをとるが，これがまた難行であった。普通の人だと二人で引いたが，自分の家では半人前が多かったから，少し小型のウスに三人かかって引いた。それでも終いには腕がなえて痛かった。

その後，唐箕や万石を使って撰別するが，自家用米はよい加減にしたが，検査を受けるものは厳重に撰別をして俵に入れて小口を結って俵〆で真中をしっかりしめて外側を規定通りに結う。これで米造りの総ての作業は終った。**[15～16]

稲の収穫が終り籾摺りがすんだ後には，新しい糯米で赤飯を炊き，神棚に供え，また籾摺りに使った道具にも供えた。庭上げといって一日仕事を休んだ。**[18]

思えば春のもみ種洗いから今日までのことをふり返ると，昔の人が米造りには八十八回手数がかかる，と云っていたがほんとにそうかも知れない，と莚に座ってつくづく思った。**[16]

作柄は普通であると，みんな云っていた。家では本田が反当り六俵半位（出来すぎて早く倒れた田がひとますあったから，少々少なかった），その当時は七俵は上田，三石はなかなかとれなかった。藺田跡は四俵位しかとれなかったが，それでもよい方だと人々は話していた。

もみすりも終って農家はほっと一息。これから麦田の谷明けにかゝるが，もう一つ蘭植えとゆう大仕事がひかえている。**[18]

(2) 麦　作

①麦播き

麦まきは直播をする家が殆んどで，家でも田んぼの空いた処から次ぎつぎに播いた。**[15]

稲の後の水田には，麦（裸）を1反歩ばかり，あとは蘭田と小麦で，10月の下旬に稲の中に蚕豆を植えてある。この蚕豆は，もう大きくなっていたので堆肥をおいてってやる。地面の草をうすく鍬で削って二条に播いて堆肥を覆った。**[15]

品種は裸麦はコビンカタギ，小麦は大ボーズをまいた。どこの家でも殆んどこの品種をまいていた。**[15]

堆肥をかつぐのも始めてで肩が痛く，少しづゝかついたが，それでも晩に風呂にはいったとき見ると赤くうれ上っていた。**[15]

麦の耕作も始めのうちはとても辛かった。毎日綿入れの胴着を着て指の出た足袋にワラジをはいて，父について田んぼに行って教えてもらったり，また見て少しづつ仕事を覚えたが，鍬を握ると掌に豆ができて，痛くて満足に持てない。

直まきの田に谷を明けて漸く畦ができたが，更に小さく砕いて仕上げる。まだ寒いから麦は地にくっついている。寒が明けて漸く日差しが伸び，少しづゝ暖かさが感じられるかと思へば，もう麦より先に草が元気に頭をもたげてくる。麦に混じっている草を取るのは端から見ると何んでもないように見えるが，仲々骨の折れる仕事であった。**[3～4]

②草取と中耕

彼岸をすぎると，急に麦が伸び始めるから草とりと中耕をくり返す。…

五月の上旬，麦が倒れないようにと最後の土寄せをしてひとまず麦の耕作は終ったが，施肥については詳しく聞いていないので解らない。[**3～4]

③麦刈り

六月になると麦が熟れて，あちこちで麦刈りが始まった。

正直にいって麦刈りは嫌だった。小麦はまだよいが，大麦（裸麦）にはイガがあって身体がチカチカさして，かゆくて閉口した。自分はこおゆうものに弱い体質であったが，それでも自分の仕事となればしかたなく，みんなと一緒に麦を刈り麦こぎをして機械ですった。摺ればすぐに実になるから仕事が早く片付くので，この点は助かった。

小麦は小さい束にして麦打台でポッテンポッテンとたたいて実を落すが，天気がよくてよく乾いているとよく落ちるが，乾きが悪いとなかなか落ちない。二，三時間もたたくと腕がだるく肩が痛くなって閉口する。

実は家に持って帰ってふるいにかけて莚にひろげて天日で乾す。適当に乾いたら撰別して俵や叺に入れて一応収穫は終るが…。

六月の太陽は相当に烈しく，汗は流れる，身体はチカチカするで，麦の収穫は一年生には無理すぎる位の重労働であった。[**7]

(3)　藺草の栽培

①藺草の繁殖

悦太郎の家もこの地方の特産の藺草の栽培を行なっていた。1910（明治43）年刊行の岡山県内務部編『岡山県の藺草』はこの岡山県の藺草栽培についてのものであるが，以後，これを援用しながら悦太郎の従業状況などをみていこう。

この藺草の栽培であるが，『岡山県の藺草』は，「藺草の繁殖法は種子を以

てすることなく，総て分株法により苗を仕立つるものなり。其方法種々ありと雖も大別して田苗，畑苗及ひ家立苗の三種とす」るが，広く行なわれているのは畑苗および家立苗で田苗ははなはだ少ないとして，畑苗床について説明している。それによると，「藺苗は総て藺田の周囲に於ける刈株より発生せるものを以て仕立つるもの」である。藺田の周囲畦畔に接する部分の株をやや高刈として，かつ普通の藺株は灌水または株の切口に泥土を塗るが，苗用のものはそのようなことはせずに，新芽を発生させる。翌年３月下旬から４月上旬にその株を掘り，土を落し，枯茎を除去して，６，７本ずつに分株し，根元から６，７寸づつを残してその先端を切り捨て，それを畑苗床に移植する。(3)

②藺草の畑苗床

畑苗床は，『岡山県の藺草』には，「可成本田と其土質を異にする所を撰ふへし」，「其床地は春彼岸頃耕起し，土塊を細砕し地面を均平にし，之れに株間四五寸，深さ一寸許りに苗を移植し能く踏み固め，床地の乾燥及雑草の発生を防ぐ為籾殻又は切藁を一面に散布し，爾後格別の培養は為さゝるものなり」，「八月下旬乃至九月上旬に至り地上三四寸を残して刈り取り，此時初めて肥料として一畝歩に付き大豆粕又は鰊〆粕三四貫匁及人糞尿を施し，爾後二三回人糞尿を施与し培養するものとす。之れ即ち畑苗にして本田一反歩に要する苗を仕立るには苗床凡そ二十歩を要す」，と記されている。(4)

このように，藺草の苗は多くは畑でつくるが，悦太郎は，

村ではこの頃みな藺苗を畑にしていた。わたしの家でも四月頃，畑を田んぼのように一面に均らし，川から水をかつぎあげて土を煉って植えて，藁を切って上に振りまいていた。そして八・九月頃，五・六寸位の所から頭を刈って施肥をした。その前にも肥料をやっていた（夏分は使いみちのないし尿などを）。**21

と記し，さらに畑で苗を作ることについては，「それは，本田に植えるとき，苗がかぎ易く，たたくときにも土がよく落ち，本田に植えてから，よく分けつ」するからであろう，としている。**[21]

しかし一軒だけ畑のない家があって，そこでは田に苗をつくっていた。大変熱心な人で毎年よい藺草をつくった。商人は遠州積みにするといって他の家よりも高く買っていた。そのうちには田に苗をつくらねばと思った，と悦太郎は記している。**[21]

③藺苗の本田への移植

移植に先だつこの整地は，「藺田は水掛り良き土地を撰び，稲収穫後充分田面の乾燥するを待ち，稲株を切り牛犁にて耕起し，四尺許りの畦とし，馬耙にて之を均し，元肥として鰊粕又は大豆粕十貫乃至二十貫を施し，再び牛力にて鋤返しを行ふ」，「斯くて移植期即ち一月上旬乃至中旬に至れは灌漑し，馬耙にて縦横に耕耙し土塊を細砕し，田面を掻き均らす」，[(5)] というようにかなりていねいに行なわれる。

この整地ずみの田に苗を植付ける。

この藺苗の移植は「移植の時期は普通一月上旬乃至中旬にして稀れには下旬に亘ることあり。其早きに過くれは収量多きも品質佳良ならす晩きに失すれは収量大に減ずといひ，通常寒の入りより大寒十日前までを移植に最良の時期と」[(6)] する。

まず，「移植すへき苗はその前日苗床より藺株を掘り起し土を落し，家に運び，一株五六本づゝに分株し，六七寸許りに其先端を切除」するという苗の堀り起こしと分株を行ない，ついで移植するが，それは「株間四寸乃至五寸とし，一坪に百二十株乃至百六十株を植ふるを普通とす」る。[(7)]

悦太郎にはこの苗の移植についてつぎのように記している。

藺苗の堀り起こし，分株などについて，苗堀り，苗かぎが行なわれる，として，

畑に行って苗を掘り土を落してかついで帰るのもちょつぴり肩にこたえたが，これは序の口。それから夜の十時頃までみんなと納屋の隅で苗をかいだが，夜が更けるに従がって寒さが身にしみて，一年生にはこたえた。**2

そして移植であるが，

さて藺植え，寒中の水の中，素足ではいると冷たさを通り越して痛い。冷たさが足をはいあがって腰の方まで冷たくなる。藁をたいて手足をよく温めて植えるが，少しうえるともう指が屈って苗を思うようにつまめない。植えようとすると指がのらないのでこぶしでさす。それでも他の者が雁張っているのにと思ったが，歯ががたがたして我慢が出来なくなって，そのまゝ上ってトンド場へ急いだが，足の裏が痛くてまともに歩かれない。トンド場に火がつくとみんなも急いであがって来て，「あゝ冷たい。それでもお前よく我慢したな」といってくれたが，植え方は良くなかった。平素から藺植えは冷たくて難儀だとは聞いてはいたが，今日はそれが身にしみてわかった。**3

『岡山県の藺草』はこの藺苗の移植について，「之れを植ふるには午前は東に向ひ午後は西に面し，日光に向つて植へ下るを常と」するが，それは，「蓋し日に向へは幾分温暖なるためならん」(8)，とその寒気の厳しさを記しているが，悦太郎の記録は，その厳しさを具体的に記したものとなっている。

④肥料

この藺草の栽培の肥料について悦太郎は，「この藺作りの施肥については父が全部やったのでその内容はよくわからないが，当時は肥料としては大豆粕が主として使われていた。満洲から大量に輸入されていたから稲作にも使った。即効性の肥料としては多木という会社で製造された硫曹とか云う肥料を使っていたが詳しくは知らない」，**3と記している。

『岡山県の藺草』は，この藺草栽培の肥料について，「上等の藺を作らんと

欲せは充分の肥料を施さゝるへからす。殊に花莚及畳表の優品を製織するには品質良好なる長藺にあらされは価値少きを以て，藺草には多量の肥料を施用せり。藺草の肥料として従来一般に用ひられたるは鰊粕とす。俗言に『藺田には百貫肥の百人夫』と称するは，肥料には鰊粕百貫を要し，栽培には人夫百人を要すと言ふに在り。然れども近来肥料供給上の変遷と価格に変動を来せる結果，経済上より魚肥を廃し之に代ふるに大豆粕又は人造肥料を配合使用するもの多きに及べり」，[9] と記しているが，藺草栽培には多くの肥料を要する。悦太郎は硫曹と記しているが，硫酸加里の誤りであろうか。

⑤耕耘・草取り

藺苗移植後の藺田には絶えず水を湛え，寒気の厳しいときは約2寸位の水を張り，温かくなると可なり浅くすることが肝要である。深田は春彼岸頃から八十八夜頃の間に一回排水し，細かい亀裂が生ずる程度に田面を乾燥させるのがよい。梅雨以後はとくに排水に注意し，ただ田面に充分な湿気を保たたしめる程度とし，夏土用刈り取前にはすべて排水する。除草は普通3月から5月の間に，2～3回行なう。[10]

悦太郎は草取りについてつぎのように記している。

藺田草とりもなかなか骨の折れる仕事で，よく生えた田んぼの草取りはきゅうくつで肩がこり，腰が痛くてとてもつかれた。

その他に水かきの仕事があったが，これはその時に応じて随時行なっていた。[**3]

⑥収穫藺刈り

藺草の収穫は『岡山県の藺草』によれば，「藺草の刈取りは七月中旬より着手するものありと雖も普通七月二十日頃より始むるもの多し。即ち土用入り後五日間を刈取りの好期とせり。刈取りの日は晴天を見定め早朝より着手」する。刈り取った藺は泥染する。刈取って束ねた藺草は，刈り取り前に予め

造っておいた染壺に入れて染める。染壺は藺田の一隅，またはその他適当の場所に設けた，5尺四方，深さ1尺許りの小池で，そこには川底に沈殿する黒色の泥土を入れ，水を入れてよく攪拌して泥水を湛えてある。そこに入れて塗めるのである。

この泥塗めした藺の乾燥を行なう。充分泥水を付着させた藺は引きあげ，傍らに設けた立木にたて，水分が滴り落ちたら乾燥場に運ぶ。乾燥場は普通は藺田の刈跡であるが，附近の畦畔，路傍，堤塘，河原なども乾燥場とする。通常は晴天2日間で乾燥が終る。[11]

悦太郎はこの藺刈りに取り組んだ。

藺刈りは天気次第ではあるが，その頃で土用（七月二十日）にはいってから刈る習慣になっていた。併し昔から土用には土を掘ってはいけないと云う伝説があったので，どこの家でも染つぼ（藺を泥染めにする坪）だけは七月二十日以前に掘っていた。

染土にはその田んぼの側の川泥を使っていたから，染つぼはみな川に近い所に掘った。つぼに水を入れるにも都合がよかった。**[10]

藺刈りが始まった。藺植えは寒さと水との戦いであったが，今度は暑さと泥との戦いで一年生の自分にどれだけやれるかの試練であった。併し家のは一反歩ばかりで，働きては一応四人いたから頭割りにすると二畝半だからそう恐れることはないと思った。

だが今まで一度も藺を刈ったことはない。父さんの半分も刈れない。そぐり手は二人いるから父さんはしんどかったが，「今年は一人ふえて楽になった」と喜こんでくれた。

晩に染めるのは父が一人で染めた。川泥もじょれんでひいて染つぼに入れ，自分は杓子でつぼに水を入れた。染めた藺を立てるのは，どうにか一人前にできたように思う。少し手ぎわは悪かつたが。

生ゆを染場に運ぶのは雁張った。母は「そう無理をするな，少しづつ再々にせえ，腰が折れたらどうする」と心配した。でも昼の暑さのことを思うと晩のこの涼しさ，気持のよさ，ゆがらに腰をすえて汗と泥の中にも何かいい知れぬさわやかさがあるなあ，とつくづく思った。**11

「悦よ，どうした」といわれて目をさますと，もうほかの者は田んぼにでかける用意をしていた。「ユをほしてから朝めしにするからな」，母は云って出て行った。これはと起きあがると腰がべきべきするようで痛かった。我慢して仕度をしているうちに次第によくなって，急いで田んぼに行って，頬ぺたに泥がつくので手拭をほうかむりをして生イをかついだ。うすいじばんを通して生イの冷たいのがハダに浸みるようで，初めはちょっと気持が悪かったがすぐなれた。

すべてが始めてだからイを拡げるのも厚いところやうすい所ができて，なかなか思うように拡がらない。手で直しながら干したが，それでも他の者よりは手ぎわが悪かった。「よいよい。生イだからまた返のだから拡げてあればえゝんだ」。そういえば何時間かの後に一度返すので，別に差支えはないようであった。

朝めしを食べて一ぷくしながら父は「今日はよく照るようだから，朝刈りを少しするかなあ」と云って，少しばかり刈って染めてほしたが，朝刈りの藺はべちゃべちゃしてさっぱり拡がらない。一度地面に大きくたたきつけて水を切って拡げるが，うまく拡がらなかった。自分はこのようにおそく乾して結構乾くのかと父に聞くに，「陽さえ照ればもっと遅く干しても乾く。却って朝刈の方が色もよい」と教えてくれた。見ると他の家では，まだこれから染めて干すらしく，染める準備をしていた。**11~12

「今日はよく照りますなあ，よく乾きますなあ」と人々は挨拶している。暑ければ暑い程よいのかも知れないが，一年生にはこたえる。「こうまで照らなくてもよいのになあ」，と思いながらみんなのするように，朝早くから生ユを拡げる，朝刈りをする，ダキを干す，藺を刈る，ダキを返す，生イを返す，藺を刈る，ダキを収納，藺を

刈る，生を束ねる。ほんとに暑い中でこうまで働かねばならないのか，と思う程忙しい。

一仕事をすまして日覆の下で休んでいると，西の山の上えに不気味な雲が出てきた。まだ生イは拡げてあるからみんな立ち上がった。刈っている家には，手を休めて西の空をみている。早い家では束ねはじめている。そこでどこの家でも一斉に束ねはじめた。隣の村でも忙しく束ねている。雲は次第にこちらに拡がってくる。もうみな必死である。遠くでは雷が鳴っている。近所の腰のまがったぢいさんまでが飛び出して近くに干してあるのを束ねている。

ようやく束ね終って一と所に重ねてコモで覆いをしていると，ポツリポツリと来た。雷も大きくなった。「ヤレヤレ間に合うてよかった」と汗をふきながら見ると，遠くの家では遅れているのか，大勢の人が寄って手伝っている。併し雨は大したこともなく，ほんのぱらぱらですんだ。

「大きうのうてよかったなあ」「ほんとになあ」とは，このときのみんなの合言葉であった。[**12～13]

ここには藺刈り労働の激しさが具体的に記されている。

(4) 畑 作 物

畑は家から150メートルほど離れた小高い丘にあった。広さは9畝歩ほどである。上下二段になっていて，その境い目に桐の木が7，8本，一直線に植えてあって，暑い時など涼み休むのに都合が良かった。隅には孟宗竹の藪もあり，一段高い隣りには真竹の藪があった。この畑では多種類の作物が栽培される。

高等小学校を中退して家で養生している頃，「畑にもよくついて行って，いも類，大小豆，粟，そば，野菜類の耕作を手伝」った。[*45] 9畝歩の畑では，藺草苗，麦，さつまいも，馬鈴薯，ササゲ，大根，粟，ソバ，ゴマなどを輪作し，また牛蒡，ラッキョウ，蕗などが作られる。[**5～6] 大根には聖護院大根，練

馬大根の名が出る。[**17] また，日常よく食べるネギ・ナス・キュウリ・葉菜類は屋敷続きの菜園でつくられる。くもし（堆肥の山）の裾に土を寄せてユウガホ，カボチャを植える。[**5～6] 一時は大麻を田3畝歩，畑1畝歩作付した。[**20～21]

畑は今まで手入がよかったのか余り草が生えなかったので助かったが，植物によっては忙がしかった。ササギを余計植えたところ熟する頃それを千切るのに閉口した。朝晩取りに行ったが，ともすれば熟れすぎてさやがはじけて実が落ちるので困った。

大根が生えて少し大きくなった頃，コガネと云う虫が出て，取ってもとってもとりきれず，少し油断をしていると全部食われてしまう。比較的のんびりできたのはさつまいも，きんかいもに麦。

ゴマは成育期間が短かくて収穫でき，ソバは秋の彼岸にまいても晩秋，初冬の頃とれ，粟は一穂ごと摘むがほが大きいので左程手数もかゝらなかった。

牛蒡にラッキョウ，蕗は殆んど手間がかからなかった。

ソバをウスでひいてソバ粉をつくり，おいしい汁をこしらへてソバがきにして食べたがとても美味しかった。[**6～7]

蚕豆もつくっていた。家では毎年一反歩ばかり蚕豆を植えていた。蚕豆をつくるのには別に肥料がいらない上に跡の稲もよくできるので，どこの家でも一反歩位は作っていた。併し五月頃大雨で田んぼに浸水することがあれば，後日木がしおれて満足に実がとれないことがあるので，少し高めの田んぼでつくらねばいけない。

栽培の方法は大体麦と同じであったが，肝心なことは五月上旬最後の土寄せをするとき，根元に近い処に鍬を入れないことで（若し草が生えていたら抜かずにそっと千切る），根元の草を抜くと次第に木がしおれて枯れることがあるから注意せねばいけなかった。

五月の中旬頃から若い実がとれる。千切って来て若い実をミソなどで炊くととても美味しい。たくさん植えてあるので毎日とりに行ったが，自分でつくった木から

若いさやを千切るのもまた楽しかった。日々腹一パイたべて終いにはもう食べたくない程に食べた。

熟した実を叺に何バイかとったが，売ったことはなく，退屈のとき炒ってオヤツ代りに食べ，またあんなどにして結構始末していた。**4～5

大小麦の収穫を終って田植えの準備にかゝるが，まだ蚕豆が残っているのでさやを全部千切った。普通の家ではさやごと木を抜いて乾し，後日田植を済ましてゆっくり始末する家もあったが。

千切った豆を莚に拡げて乾して唐竿またよじろで打って実と皮とを別けた。**8

…一寸畑にも行って見たが何もしなかった。ササギやさつまいもも大豆なども見違える程大きくなって，ここではひと雨欲しい状況であった。**13

畑では黶刈りの終った頃からぼつぼつササギが熟れだすから，これは何をおいても取りに行かねばならん。採るのが後れるとはじけて実が落ちるから油断が出来ない。他の作物の耕作は取急いでする要もなかったが，ササギだけは忙がしかった。それでも田の草の合い間に行って，大豆や栗の中耕，さつまいものつるをあげて谷の草を削って谷を引いたりした。畑の仕事は田の草とは違って何処でも腰をかけて休めるからよかった。**13～14

祭りがすんで畑の粟がよく熟れたので穂をつみに行った。粟の穂は大きい。それが大きく頭を下げているのを見ると，何だか今年は豊年と云う感じがした。大きいから摘むのにそう大した手間はかからない。乾して実にすると可成りの収穫があった。ウスでついて精白にして糯米を六割ばかり交ぜて粟餅をつくったら黄色でキレイな餅が出来たので早速食べて見たら味は思った程のことはなかった。きれいではあったが矢張り雑穀は雑穀であった。

田のあぜや畑の大豆も熟れたので抜いて帰って豆こぎをこいで実をとった。黒豆

のよいのもとれた。家ではこれで味噌をつき，キナ粉やオイリにして食べて残りは売った。

楽しみだつたのはいも堀りだつた。つるを切りあげて太いぢくのまわりを大きくうがすと大きないもが鈴なりに出て来るので面白く楽しかった。家ではみんないもが好きだったから総がかりで畑に行って堀った。いものちちが手についてなかなか落ちずちょっぴり嫌なところがあったが，当分焼いたりフカシたりしてふんだんに食べられるか，と思ったらかついで帰るのもそうしんどく感じなかった。

少し遅れてソバが熟れた。刈って帰って豆こぎでこいで，何日も乾したらよい実がとれたが，少々収量がすくなかった。併しこれは或いは栽培の方法がまずかったのではないかと思った。寒くなった時これをウスでひいてソバ粉をつくり熱いおいしい汁でこの粉を練って「ソバガキ」をして食べてたがとても美味しかった。

畑の今年の最後の仕事は大根ひきであった。天候もよくて丸い聖護院大根に，長い練馬大根がよくできた。練馬大根などは余っ程気をつけて上手に引かないと途中から折れることがあった。

当座に食べるものはそのまゝ畑に残しておいて，引いた大根は家に持ち帰って大小いろいろに分けて適当に束ねて軒先や竿をこしらえてかけて乾した（大きいものは沢庵漬に，長く細いものはねじ大根に，折れたりキズのあるものは切干大根にした）。

適当に乾いた頃竿から下ろして表面を藁でこすって大きい樽に糠と塩とで漬けたが，これは父さんの仕事であった。また浅漬といって余り乾かさずに漬けて数日経って食べるのも拵えた。**[16～17]

(5)　農業の改善

以上は初めて本格的に農業に従事した1915（大正４）年の農業従事である。「ただ父母に言いつけられた仕事を手伝った程度で，わたしとして何ら積極的な勉強もしなかった」。つぎの年，17歳となり，少し勉強しなければならないと思っていた矢先，農業熱心な人がいて，種苗会社やのカタログをく

れた。種々めずらしい草花や果樹の絵などがあつたが，そこにあった「薬草と毒草」，「日本農事改良会報」の広告があり，それを取り寄せて勉強した。**[19～20]

新しい作物を栽培した。それは大麻である。この地方の特産の畳表の経糸をこの地方ではヒメといったが，この経糸の原料の荒そは栃木県から移入していた。その皮が荒そとなる大麻を試作して好成績をあげた先例をみて，一斉に栽培しはじめた。町の農会でも力を入れて種子の購入斡旋や栽培指導を行なった。悦太郎の家でも畑に1畝歩，田に3畝歩ばかり植えた。春彼岸頃ていねいに整地して，広い6，7尺の畦にしてガンギを横に切って密植に播く。7月上旬に収穫する頃には7，8尺くらいになった。6月の暑くなった頃には谷に水を入れて水分を補給した。畑は乾きやすかったから5，6尺くらいにしかならなかったが，その代り皮が薄く良質のものがとれた。

収穫は7月上旬である。丈夫な特製の鋏で根元から刈って，刀の形をした棒で葉をしごくようにして払い落す。それを釜で蒸したり，茹でたりした。蒸しあがったものは乾かぬように束ごと川に投げ込む。皮むきは根元の部分の皮を少し剝いで指に夾み皮を手前にしごく。剝いだ皮は竿にかけて陽で乾かす。

大麻づくりは畳表に必要なよい作物であったが，収穫時期が7月であったので，藺刈前と田の草取りのもっとも忙しい時であったので，手間の少ない家は思うようにいかなかった。**[20～21]

1918（大正7）年には米騒動があった。農家では米を売って麦を食べることが行われた。米をつくることに力を入れるとともに，麦作に力を入れだした。

各地に麦作講習会が行われた。**[25] 稲作と藺作の講習も行われ，改良研究会が結成されて多収穫品評会が毎年行われるようになった。**[25] 村の青年の間に農業研究熱が高まり，「長津青年農事改良研究会」が結成された。**[25]

やがて，研究会の会長となった悦太郎は，いつそう責任を感じて，会員とともに研究・改良・増産に励んだ。町主催の多収穫共進会はもとより，郡の共進会，さらに都窪・浅口二郡連合の共進会にも出品して入賞していた。そして一応若い精農家と人にいわれるようになって，ある年，町から選抜されて愛媛県の余土村に稲作の視察を行つた。余土村は当時稲作の多収穫で名を知られたところで，その村の役場や精農家の家を訪ねていろいろ説明を聞いた。**[28]

栽培の方法についてはそう大した変りはなかったが，その人は「二化めい虫の被害の茎を極めて早期に発見して切り取る」とのことであった。稲の穂ばらみのとき，「ほんの少し色が変っているときに切り取る。赤くなってからでは効果が少ない」といっていた。**[58]

この愛媛県の余土村は，温泉郡に属し，松山市から西南１里の地である。ここには盲目の村長の森恒太郎なる人物のもと，折からの「町村是」作成に熱心な所である。[12] そこに派遣されるなど，まさしく青年精農家として活躍しはじめた。しかし，まもなく，後にみるようにわずかりの耕地の農家となり，藺莚づくりを仕事としていくようになるのである。

5　藺莚製造

畳表・花莫莚に関するものに，「藺植え」，「藺刈り」，「祭りまえ」（畳表織り），「大麻をつくる」，「藺草について」，「ゴザ織り」などがある。

佐藤悦太郎は，1915（大正４）年の項でつぎのように記している。

盆がすぎて秋の鶴崎様の大祭まで五六十日の間は田んぼの仕事がずっと少くなるので，父が藺落しをしつゝ外の仕事をすることになって，自分は内の仕事を手伝う

ことにした。この地方の副業は特産の畳表を織ることで，どこの家でも祭り前といって一生けん命にこの期間，表を織った。

自分はヒメウミ（経糸をつむぐ）のけいこから始めた。最初はうまくウメなかったが，すぐなれて上手にウメるようになった。藺の本を抜いたり藺選りを母と交代で，また母は姉と交代で表を織った。

彼岸が来て涼しくなればどこの家も必死の状態で，手間のよい家では交代で夜通し表織りに精を出す。真夜中すぎて小用に外に出ると，はなれた隣村にあちこち灯が見え，耳をすませばカッタンコットンの音がしきりに聞こえてくる。**[18]

自分はガラガラとヒメウミ機を踏みながら「どうしてこの地方の者はこの様にガムシャラに働かねばならんのだろう，祭に金がいることは一応わかるが，こうまでしなくても…」と考えたがどうも解らなかった。**[19]

旧盆すぎからの2カ月ほどの間，農家の婦女子が畳表の製造に従事する様子が描かれている。原料の麻をもって経糸を紡ぐこと，藺草の芯を抜くこと，そして織り立てることを婦女子が行なうこと，秋の鶴崎神社の大祭を目途に，その間，人手のあるところでは交代で徹夜で行なわれること，その徹夜での織り立てがかなりの家で行なわれていること，などの描写である。

藺草は，長藺は花莚製造用として販売され，短藺＝六藺でもって中継ぎの畳表を製造したという記述があった。しかし，悦太郎は，

藺草については藺草をつくって売るばかりではなくこれを利用して特産の畳表を製造して農家の経営の一助とすることで，い草作りはこの地方では米麦と共に重要な作物であるからしぜんこの栽培に力を入れたが，長津の部落でも講習会を開き研修したが，更にと思って茶屋・帯江・豊州・早島の四ケ町村連合の講習会にも出席して一応の技術は習得したが，ここで私は考えた。

只ものを作ることばかり考えていては駄目だ。出来得る限りこれを利用して収益

をあげ農家の経済を豊かにすることが第一である。幸いこの地方は良質の藺草ができるから益々この草の増産を図る反面，特産の畳表の製造にも今一層努力する必要があると思って，少しづつではあるが農作業も経済的に行なわねばと，良質の大麻がとれなかったので栽培をやめ，畑作も栗，ソバをやめて手間のかからぬさつまいもと大豆を主とし，大根，ササギは父の仕事として極力わたしの余暇をつくって閑さえあれば畳表を手伝い，また私自身も此頃では充分人並に織れるようになっていた。

表を織りながら私は今は短い藺ばかりで表をおっているが，長い藺を織ればなあと終始思っていた。ーいや「きっとそうしてみせる」と意欲をもやしていた。**[28～29]

そして，

二十五才の春，私は妻を迎えた。弟も大分大きくなつたので藺草を四反ばかり植えた。その頃この地方で四反植える家は少なく二反余りが普通であった。これは予てから考えていた長イを使ってのゴザ織を仕様(ママ)と考えたからであった。妻が家へ来る前ゴザを織っていたので丁度都合がよかった。早速，機を新調して残していた藺をもって織って売ると藺草で売るよりずっと利益が多くもうかったので，今度出来る藺は全部自家製にして売るとして村では始めてゴザを織った。**[29]

新藺がとれた時分に古い機を一台買いたして長イものから短いものも殆んど織り，ずっと短いものは畳表に織った。家のものも表を織るよりもこの方がよいとゴザ織りを喜こんでしてくれた。次の年も植えて益々田んぼの合い間に盛業にやろうと思った矢先思わぬ大障害が起きた。**[29～30]

それは思いもしなかった肺尖カタルと神経痛になったことである。肺尖カタルは数カ月で治ったが，神経痛は続いた。左半身が痛くて思うように仕事ができない。大分長らく医者に通ったが駄目であった。「重労働はできないから農業は無理だ。何か軽い仕事をしなさい」，と医者に宣言された。**[30]

家を弟に譲って近くの田圃に小さい家を建て、貰って分家した。三反ばかり分けてもらって飯米百姓になった。当分藺草を少しばかりつくってゴザ織りでもするより外に道はない。これで私は百性に別れをつげてどっちつかずの人間になって仕舞った。**[30]

当初，畳表を造っていたが，25歳のときに花莚の製造の経験のある女性を妻に迎えたのを契機に自家生産の藺草のうちの長藺を使つたゴザ＝花莚製造を始めた。そして，家督を弟に譲り，ごく小さい農地のみを貰い受けた悦太郎は，以後はこの花莚製造を行なうようになっていくのである。

註

（1）以上２の節の叙述については，その出所などは拙稿「主要藺業地早島町における藺莚業」『岡山大学経済学会雑誌』第29巻第４号 1998年３月。なお拙稿「藺業」『早島の歴史２通史編（下）』1998年 早島町。
（2）『早島の歴史２ 通史編（上）』1997年 早島町 129～130ページ。
（3）岡山県内務部編『岡山県の藺草』1910年 18～19ページ。
（4）（3）と同一書 19～20ページ。
（5）（3）と同一書 21ページ。
（6）（3）と同一書 22ページ。
（7）（3）と同一書 22ページ。
（8）（3）と同一書 22～23ページ。
（9）（3）と同一書 23ページ。
（10）（3）と同一書 30ページ。
（11）（3）と同一書 39～40ページ。
（12）森恒太郎『町村是調査方針』1909年 丁未出版社。